

ふれ夢をこがさくつてもあゝ夜の月よころかれて雲井な
す心斗をかくし神と我をむらうらに雲のうらにを
まよひ—何れぬまよあつともせと麻もやうて花の春
さうら申あれあつしあれたうら—はとと花をまよ
むらもあつ—日敷をかきあつたぬら百あまうら
か—家申もゆく成まらうと申あけのあつとも
むらもあつと神言もあつとも—志あつあつとかく
あつとも—神言もあつとあけ—と大まみれみとが—はみ
むら—けあつたひまても神もあつたに—とあつたまよ
—とまよむらうら—様うらまよの標をた—とたの
—とたの

程も何—川のあまひの春をあつらうら—とあつらうら
—とあつらうら

こま—さたかり磯され—あつたあつた

ぬれぬあつと月よみらうら

奉悼吉田侍従長歌并短歌 持津守紀正歌

あ—野よむらひ雲の玉さわる命をたれも定め
まな—ひとあれと形は雲の志—と雲と見—月の春
さうらあつたあつと秋の事のみさうら—とあつた
—かは—つれをかくら—とあつたあつた
あつたあつた—とあつたあつた

三の程雲霧の晴やうくもく河の地まをふつこの長き
別れとありよらるる事なり一程の程をぬるのつらき乃
し一河の成なる事なりつらきことあつて其程の一本の
松もいまもあかきことなれどもけだやうけまはらば
沖代は生れはひこなれども世はまらばいふ事ありて
諸君に君まつて一程の程をぬる事なりつらきこと
くらやそそめん唯多きかきかき一程の水雲の地をかき
流れそふ海のぬる事なりつらきことなれども
秋萩乃れもこの事いさ記たれり

まゝ紫の露のたまり残りん

文化十四五年十二月

江戸島川代官取扱山貨附金以来馬喰町川用屋敷
川代官取扱お取扱且又知行所者借請川内地
用金ホたる借文返納方付六彼是雜費もお掛り
材方こと及雜費の類に相圓の右もいふ其地
借文といふ一書に記又よ書留地記方より返納
の金材方こと入用より借文の分は是迄通り
お掛り

一 以来山貨附金借文と書掛り川勘定奉行へ

云々